

〈原著論文〉

コロナ禍を経験した留学生の所属大学に対する コミュニティ感覚

岡村佳代

抄 録

コロナ禍において留学生を取り巻く大学コミュニティや大学教育をめぐる環境が大きく変容し、留学の意義が問い直されている。本研究では、このような状況下における留学生のコミュニティ感覚を明らかにすることを目的とし、東京都内の大学に在籍する5名の留学生に対する質問紙、インタビュー調査を実施した。SCATによる分析の結果、5名の留学生それぞれのコミュニティ感覚が示され、コロナ禍によるコミュニティ感覚への影響は限定的であることが示された。また、留学生が被受容感や自己有用感を得られること、日本人学生、留学生双方の異文化間コンピテンスを高めることで、留学生のコミュニティ感覚を高める可能性が示唆された。

キーワード：外国人留学生、コミュニティ感覚、コロナ禍、大学コミュニティ、SCAT

1 問題の所在

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）のパンデミック（世界的な大流行）は、急速に進行していたグローバル化の動きを止めた。特にヒトの動きは制限され、日本においても外国人入国者等総数は、パンデミック以前の2019年は36,148,684人であったが、パンデミック後の2020年には5,226,568人（対前年比86.2%減）となった（出入国管理庁, 2022）。在留資格別外国人新規入国者数においても、対前年の減少率が87.4%となっており、日本に入国する外国人が大幅に減少したことがわかる。在留資格「留学生」に目を向けると、新規入国者数は、2019年121,637人であったのが、2020年には、対前年比59.1%減の49,748人となった（出入国管理庁, 2022）。また、外国人留学生在籍状況は、留学生30万人計画の数値目標である30万人を達成した2019年は312,214人であったが、2021年は242,444人（2019年比77%）となっており、69,770人減少している（日本学生支援機構, 2022）。このように、コロナのパンデミックは日本における留学生の受け入れにも大きな影響を与えた。

日本留学の入り口への影響だけではなく、すでに日本に留学し、大学に在籍している留学生にも、その影響は及んだ。コロナの感染拡大防止のために、多くの大学では2020年度の授業開始時期の延期、授業形態の変更、大学キャンパスへの入構禁止、イベントの中止などの措置がとられた。コロナ禍は大学における教育のあり方を変容させ、「留学」の意義にも疑問を投げかけた。海外留学は異文化間能力、外国語運用能力、学業面、社会性・人としての成長、キャリア・エンプロイアビリティ、社会貢献に肯定的な影響を与える（新見，2018）とされるが、これらは異文化のなかに身を置き、対面での人々との交流を通して得られるインパクトであろう。求めていた理想的な留学とは異なるコロナ禍での大学生活を、留学生はどのように捉えていたのだろうか。

2 先行研究と研究目的

2.1 コロナ禍における日本居住の外国人留学生

コロナの感染拡大当初、誰もが先の見えない不安を抱えていたが、日本の大学に在籍し、コロナ禍においても異国日本で留学生生活が続いていた留学生の不安は計り知れないものがあっただろう。コロナ禍における留学生に関する調査において、多くの留学生の困難が取り上げられている。近藤・石倉・中野（2020）が2020年4月から5月末に行った調査のうち、日本で学ぶ留学生552名の回答を見てみると、ほとんどの留学生が「留学を継続し、頑張りたい」と回答している一方で、感染への不安やインターネット授業への不満があげられている。また、藤・林（2021）が2020年7月に中国人留学生155人を対象として行った調査においても、自身や家族の感染・健康への不安や入学、進学、学業に関する不安などの心理面への影響があげられている。さらに、高橋（2022）が2020年12月に行った、留学生6人を対象に行ったインタビュー調査でも、コロナ禍において留学生が経験した困難として、講義や学習形態の変化、特に、オンライン授業に伴うモチベーションの低下や実験や実技科目のあり方に対する意見があげられている。このように多くの留学生が感染への不安や学業への不安、不満を抱えていたことが示されている。

一方、村田（2022）が2021年12月末に行った国内外にいる留学生154人を対象に行ったアンケート調査では、コロナ禍における勉学について、9割以上の学生が「たくさんできた」「ある程度できた」と回答している。オンラインが中心となった授業環境においても勉学はある程度できたと感じた学生が多かったことが示され、コロナの影響が長引くなかで、留学生自身の慣れ、オンライン授業の進化等により、学生の不安、不満が多少なりとも解消された可能性が考えられる。しかしながら、同調査における学生間の交流がどの程度できたかという質問に対しては、「あまり/全くできなかった」と回答した学生が44%となっており、オンライン中心の授業環境においては学生間交流が不十分であったとの回答が半数近くを占めている。人とのつながり、かかわりについては、高橋（2022）においても「コミュニケーション機会の不足」の状況が明らかにされている。また、

コロナに関連した差別経験や日本社会からの眼差しに対する不安（藤・林，2021；高橋，2022）もあげられており，対面交流ができないことだけに限らない，人とのかかわりにおけるコロナの負の影響があげられている。

2.2 コミュニティ感覚

コロナ禍において，留学生は大学の授業形態の変化や人とのつながり，コミュニケーションに対して不安や困難を抱えていたことが示されている。すなわち，これらの不安はコロナによる大学環境の変容により引き起こされたといえる。人間の行動や感情，認知は，単に個人特性の函数ではなく，生活体としての人間とその生活環境との相互関係の複雑な結果であるという「人間—環境適合」の概念（笹尾，2010）からすると，コロナ禍における留学生の心理的側面を探るためには，環境との相互関係のなかで捉える必要がある。そのため，コロナ禍において留学生を取り巻く環境として最も身近な大学との適合を検討するうえでは，「コミュニティ感覚」を明らかにすることが有効であると思われる。

「コミュニティ感覚」は，所属するコミュニティに対して人々が持つ態度で，「他者との類似性の認知，互いに尊重し合う相互依存的関係，自己が相手に望むものを相手に与えることによりその関係を維持しようとする意思，より大きく安定した，頼ることのできる構造に所属しているという感覚（S. B. Sarason, 1974）」や，「メンバーが持つ所属感，メンバーがメンバー同士あるいは集団に対して持っている重要性の感覚，また，集団に共にコミットメントすることによってメンバーのニーズを満たすことができるという信念の共有（MacMillan & Chavis, 1986）」と定義される。MacMillan & Chavis (1986) は，コミュニティ感覚の理解と測定のために，Sense of Community Index (SCI) という心理尺度を作成し，その構成要素として「メンバーシップ」「影響力」「統合とニーズの充足」「情緒的つながりの共有」の4つをあげている。「メンバーシップ」とは，コミュニティの境界や情緒的安心感，所属感，コミュニティに対して行う個人的投資などの概念が含まれる。「影響力」には，コミュニティに対する影響力，コミュニティ自体がメンバーに影響を与えているという感覚など，コミュニティとメンバーの互恵的關係の重視に関する概念が含まれる。「統合とニーズの充足」は，メンバー間での価値観の共有とともに，コミュニティのメンバー間で資源のやりとりが行われ，個人の欲求が満たされることである。また，コミュニティを通してメンバー間のニーズが統合されることから，自己のニーズの達成が他者のニーズと結びついているという感覚が得られるものである。「情緒的つながりの共有」は，コミュニティのメンバー間のポジティブな交流，重要な出来事や問題を共有し解決することによる精神的つながりを指し，真のコミュニティにとって決定的な要素とされる。このコミュニティ感覚は個人のQOLを高める非常に強力な力であり（Dalton, Elias & Wandersman, 2001），コミュニティ感覚の高さと，人生への満足感や主観的幸福感の高さ，孤独感の低さとの間には正の相関が確認されている（植村・笹尾，2010）。また，

教育現場における研究においてもコミュニティ感覚のポジティブな影響が報告されている(Lounsbury, Loveland & Gibson, 2003)。日本の大学生を対象とした調査においては、所属大学へのコミュニティ感覚といきいき度尺度の相関から、コミュニティ感覚の強さがポジティブな精神状態と関連があることが示されている(井上・久田, 2015)。また、同調査において、コミュニティ感覚の高低には、入学時の志望度や教員からのサポートが大きく関与し、授業に対する満足度や課外活動へのコミットメントの度合いも影響していることが示されている。池田(2006)が、「コミュニティ感覚を高めることは、種々のコミュニティにおける問題を解決するにとどまらず、問題の予防、さらにはより良いコミュニティを作り上げるために大きな役割を果たすことが期待される」としているように、大学においても所属学生のコミュニティ感覚を高めることがより良い大学コミュニティを作り上げるうえで重要であるといえる。

2.3 研究目的

留学生の所属大学へのコミュニティ感覚に関する先行研究は管見の限り見当たらず、コロナにより留学生を取り巻く大学コミュニティや大学教育をめぐる環境が大きく変容し、留学の意義が問い直されている現在において、留学生の所属大学へのコミュニティ感覚を探ることは重要な課題の一つであるといえる。本研究では、日本の大学に所属し、コロナ禍を経験した留学生のコミュニティ感覚を明らかにすることを目的とする。そのうえで、留学生のコミュニティ感覚を高めるための方策について考察を行う。

3 研究方法

3.1 調査の概要

2021年2月～4月にかけて、東京都内の私立大学に在籍する留学生5名を対象に、自由記述式のアンケート調査および、その内容に関するインタビュー調査を実施した。対象者の詳細は表1の通りである。質問紙の構成は、大学の専攻、年齢、国籍、日本語能力などの属性に関する質問と所属大学へのコミュニティ感覚に関する質問からなる。大学へのコミュニティ感覚については、1) 所属大学に受け入れられていると感じるか、2) 大学の人々との人間関係はどうか、3) 所属大学の一員としてのメンバーシップを感じるか、4) 所属大学に貢献したいと思うか、5) 所属大学は自分に合っていると思うか、6) 所属大学の学生であることは自分にとってどの程度重要か、という質問項目について自由記述での回答を求めた。

インタビュー調査においては、これらへの回答についてのより具体的な内容に加え、大学の居心地や自分の能力に対する周囲の評価、大学の人々との価値観の共有、大学への所属感や人間関係へのコロナの影響などについても質問した。インタビューは、一人につき1時間程度、Zoomを利用

して実施した。なお、これらの質問紙調査、インタビュー調査に際しては、聖学院大学研究倫理委員会の審査を経ており、対象者に対して研究目的や調査内容、個人情報や人権の保護に関する説明を十分に行い、同意を得た。

表 1 対象者の属性

対象者	専攻	学年	年齢	国籍	来日年	日本語能力試験	性別
A	経営	4	22	中国	2015	N1	F
B	生物学	2	20	中国	2018	N2	M
C	数学	2	21	中国	2018	J.TEST A 級	M
D	商業・貿易	4	23	ベトナム	2015	N1	F
E	情報電子システム	4	24	ネパール	2015	N2	M

3.2 分析方法

質問紙調査で得られた自由記述データと、対象者の許可を得て録音したインタビューの音声を文字化したデータを分析の対象とし、SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷, 2007, 2011, 2021) により分析を行った。

表 2 SCAT 分析例

番号	発話者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	(5) 疑問・課題	
1	A	受け入れられていないと感じます。国籍や性格などの原因で授業で日本の学生とのコミュニケーションがあまりないです。毎日授業の後ですぐ家に帰るので、大学生生活は「家-授業-家」です。	受け入れられていない/国籍や性格などの原因/日本の学生とのコミュニケーション/あまりない/大学生生活は「家-授業-家」	被受容感のなさ/国籍や性格の差異に起因する日本人学生とのコミュニケーションの少なさ/短調な大学生生活	被受容感-被拒絶感/疎外感/原因帰属/外的帰属/アウェー感/目に見えない壁/外集団/コミュニケーション能力/空虚感	所属大学における被受容感のなさ/国籍や個人特性に起因する日本人学生との壁/単調な留学生生活への空虚感	大学における被受容感のなさの認識は、日本人学生との関係によって生じているのか。	
2	A	やはりあることに対する意見が違おうと思います。例えば、授業でグループワークしていた時は、私は中国人としての意見と日本人のクラスメイトの意見はなんか違うけど、こちらとこちら、どちらも自分の意見が正しいという気持ちを持ち、全然交流できない。文化の原因だと思いません...	意見が違う/どちらか自分の意見が正しい/全然交流できない/文化の原因/...	異なる意見/双方の意見の主張/深まらない関係/文化への原因帰属/...	関係構築におけるアサーションスキル/多様性受容/異文化トレーニング不足/交流の閉鎖性/外的要因への原因帰属/...	異文化受容態度の未形成/異文化コミュニケーションスキル不足/日本人学生との関係構築の難しさ/文化的差異による日本人学生、留学生双方の交流の閉鎖性/...	異文化コミュニケーションや異文化理解に関する科目の受講機会はないのか。...	
	番号	発話者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	(5) 疑問・課題
		ストーリー・ライン	A は「国籍や個人特性に起因する日本人学生との壁」による「所属大学における被受容感のなさ」を感じ、それが「単調な留学生生活への空虚感」につながっている。また、「異文化受容態度の未形成」や「異文化コミュニケーションスキル不足」のために「文化的差異による日本人学生、留学生双方の交流の閉鎖性」が顕著になり、A は、「日本人学生との関係構築の難しさ」を認識している。...					
		理論記述	・「国籍や個人特性に起因する日本人学生との壁」による「所属大学における被受容感のなさ」が、「単調な留学生生活への空虚感」につながる。 ・「異文化受容態度の未形成」や「異文化コミュニケーションスキル不足」から「文化的差異による日本人学生、留学生双方の交流の閉鎖性」が顕著になると、留学生が「日本人学生との関係構築の難しさ」を認識する。 ...					
		さらに追究すべき点・課題	・大学における被受容感のなさの認識は、日本人学生との関係によって生じているのか。 ・異文化コミュニケーションや異文化理解に関する科目の受講機会はないのか。 ...					

SCATでは、テキストにおける表層の文脈が4段階のコーディングによって脱文脈化され、それがストーリー・ラインで再文脈化される。また、その再文脈化の結果から理論記述を行うという手続きを有する。具体的には、まず、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、それらにそれぞれ〈1〉データの中の注目すべき語句〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念、の4段階でコーディングを行った。次に、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論記述を行った。SCATの分析フォームを用いた分析例を表2に示す。対象者5名それぞれのデータを回答ごとにセグメント化したうえで4段階のコーディングをし、ストーリー・ラインと理論を記述した。本稿では、それぞれの質問に対する「〈4〉テーマ・構成概念」と「理論記述」を示す。

4 結果と考察

対象者A～E、それぞれの分析結果について、表2の太枠に示された「〈4〉テーマ・構成概念」と「理論記述」を表3～表7に示す。その後、それぞれのコミュニティ感覚の特徴を、コミュニティ感覚の構成要素とされる「メンバーシップ」、「影響力」、「統合とニーズの充足」、「情緒的つながりの共有」の4つの側面からまとめる。また、所属感や人間関係におけるコロナの影響を取り上げる。

4.1 Aの所属大学に対するコミュニティ感覚

Aの所属大学に対するコミュニティ感覚に関して、40のテーマ・構成概念が得られ、16の理論記述が示された(表3)。まず、「メンバーシップ」にかかわる所属感は希薄である(理論記述6:以下、番号のみで示す)。また、大学の居場所としての機能不全を感じる(5)など、情緒的安心感も得られていないことが示されている。個人的投資についても、大学に対して自分の能力を提供してもいいという意識はある(7)が、これまでに自分の能力を大学に提供した経験はない。もし、大学から選抜され能力の提供を依頼されることがあれば、Aの自己有用感が高まるのと同時に大学への貢献もできるなど互恵的な関係が形成され、「メンバーシップ」や「影響力」の感覚が高まる可能性があったと考えられる。しかし、インタビュー時点において「影響力」の感覚がなく、それは、周囲からの評価の不明さ(8)が一因であると考えられる。また、「統合とニーズの充足」については、Aのニーズとしてブランド力のある大学、大学院進学や、より良い就職をすることなどがあげられるが、所属大学には不本意入学であったことから、自分に合っている大学だという感覚が持てず(11)、入学時点で自分のニーズを満たす大学ではないと感じていた(15)。また、進路に対する価値観は日本人学生とは全く異なるという感覚があった(10)。さらに教職員との関係も

表3 Aの分析結果（テーマ・構成概念と理論記述）

大学に受け入れられていると感じるか
所属大学における被受容感のなさ／国籍や個人特性に起因する日本人学生との壁／単調な留学生活への空虚感
大学の友人、先輩後輩、教員、職員など大学の人々との関係
異文化受容態度の未形成／異文化コミュニケーションスキル不足／日本人学生との関係構築の難しさ／文化的差異による日本人学生、留学生双方の交流の閉鎖性／内集団との交流の安心感／留学生中心の交友関係／日本人の友人の少なさ／希薄な教職員との関係／周囲への相談希求のなさ／自己解決
大学の居心地
大学の『居場所』としての機能不全／オンライン授業の居心地の悪さ
大学の一員としての感覚（所属感）
所属感の希薄さ／所属大学の道具的価値
大学に対する自分の能力の提供
自己能力提供への意欲／能力提供依頼／選抜／社会的欲求／承認欲求
大学における自分の能力への周囲の評価
大学教員からの自己能力への評価の不明さ／留学生の友人からの得意分野への評価／武漢出身
大学の人々との価値観の共有
自身の特殊な価値観／日本人学生にない価値観
大学は自分に合っているか
学歴重視／第一志望の大学不合格時の落胆／所属大学の不適合感／4年間での自己能力受容／所属大学は不本意入学／能力相応／カリキュラムには満足している／自分が得た知識への自信
所属大学の学生であることの重要性
学歴社会の中国／必要最低条件としての「大卒」／「大卒」以上の付加価値のなさ／より良い就職のための大学院進学
大学への所属感や居心地、人間関係に関する新型コロナウイルスによる影響
コロナの影響を受けないほど希薄な所属感
理論記述
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「国籍や個人特性に起因する日本人学生との壁」による「所属大学における被受容感のなさ」が、「単調な留学生活への空虚感」につながる。 2. 「異文化受容態度の未形成」や「異文化コミュニケーションスキル不足」から「文化的差異による日本人学生、留学生双方の交流の閉鎖性」が顕著になると、留学生が「日本人学生との関係構築の難しさ」を認識する。 3. 「内集団との交流の安心感」から「留学生中心の交友関係」を築き、「日本人の友人の少なさ」を実感する。 4. 「教職員との希薄な関係」による「周囲への相談希求のなさ」から、「自己解決」を目指す。 5. 「大学の『居場所』としての機能不全」を感じると同時に「オンライン授業の居心地の悪さ」も感じる。 6. 「所属感の希薄さ」は「所属大学の道具的価値」のみを認識させる。 7. 「社会的欲求」や「承認欲求」から、大学に「選抜」され「能力提供依頼」があれば、「自己能力提供への意欲」がある。 8. 「大学教員からの自己能力への評価の不明さ」を感じる。 9. コロナ禍での「同国出身留学生からの武漢出身いじり」があるが、「留学生の友人からの得意分野への評価」は感じる。 10. 「自身の特殊な価値観」は「日本人学生にない価値観」である。 11. 「学歴重視」の留学生が、「第一志望の大学不合格時の落胆」を感じたまま「所属大学への不本意入学」をすると、自分の能力と「所属大学の不適合感」を感じる。 12. 「4年間での自己能力受容」により所属大学が自分の「能力相応」であると感じる。 13. 「カリキュラムへの満足感」は、「自分が得た知識への自信」につながる。 14. 「中国は学歴社会」で「必要最低条件としての『大卒』」という認識がある。 15. 所属大学の「『大卒』以上の付加価値のなさ」を感じると、「より良い就職のための大学院進学」を目指す。 16. 「コロナの影響を受けないほど希薄な所属感」である。

希薄であることから (4)、自分のニーズを満たすために大学の資源を活用しようという意識が持たず、自己解決することを選択しており、「統合とニーズの充足」の感覚も希薄であるといえる。し

かし、大学での学びについては、カリキュラムへの満足感や授業で得た知識に対する自信が感じられ(13)、それが自己能力の受容(12)につながったことから、Aのニーズの一部は満たされたといえる。「情緒的つながりの共有」については、Aは、日本人学生とのポジティブな交流の経験が少なく、日本人学生との壁を感じ、良好な関係を構築できなかった(1, 2, 3)。

Aの所属大学へのコミュニティ感覚は総じて希薄な状態であるといえるが、コロナによる影響については、特にないという認識である。元々所属大学へのコミュニティ感覚が希薄である場合、コロナ禍においても所属感や人間関係が大きく変化することはなかった。

4.2 Bの所属大学に対するコミュニティ感覚

Bの所属大学に対するコミュニティ感覚について43のテーマ・構成概念が得られ、16の理論記述が示された(表4)。

Bの「メンバーシップ」にかかわる所属感は希薄(7, 14)であり、大学における情緒的安心感に近い居心地の良さや愛着は未形成ではあるが(5)、より良い留学生の獲得により、大学コミュニティの環境保全をしたいという意識がある(8)。そのため、いかなる場合でも無償での自己能力の提供はしないという意識を持ちながらも、自分のために留学生に情報提供を行うなど、自発的に大学コミュニティに対する貢献を行っている(8)。次に、「影響力」については、留学生のSNSグループを開設し、管理者となるなど、留学生の中での中心的役割を担い(2)、留学生への情報提供をしている。また、教員や友人からの直接的な肯定的評価があることで、自己肯定感が得られる(9)など互恵的關係にあり、「影響力」の感覚は比較的高いと考えられる。「統合とニーズの充足」に関しては、Bのニーズとしては自身の学びの追求がある。所属大学のカリキュラムに対しては肯定的な認識があり(12)、カリキュラムへの満足感が大学からの被受容感につながっている(1)。一方、カリキュラムや研究環境への否定的な感覚もあり、所属大学が自分のニーズをすべて満たしているわけではないと感じている(11, 12, 13)。また、日本人学生とは育ってきた環境や社会的な背景が異なることで価値観が全く異なると認識しており(10)、他者とのニーズの結びつきがあるという感覚もない。「情緒的つながりの共有」については、留学生との相互依存可能で良好な関係を築くとともに、日本人学生ともSNSを通じた関係構築に成功している(2)。また、ゼミ内の教員、所属学生との関係も良好である(3)。しかし、日本人学生との関係はゼミに限定されており、信頼関係までは構築されていない(4)。

Bの所属大学へのコミュニティ感覚は一見希薄なようにも見えるが、被受容感がある、留学生や教員との良好な人間関係を築き、自分の影響力を認識している、自分が身を置く環境、つまり所属大学の環境を汚されたくないという思いから間接的に大学への貢献をするなど、互恵的な関係を築いているという点で、ある程度のコミュニティ感覚があると考えられる。コロナによる影響はあまり見られず、Bが効率的な学びを重視しているため、オンライン授業のメリットを感じたりSNS

表4 Bの分析結果（テーマ・構成概念と理論記述）

大学に受け入れられていると感じるか
大学における被受容感／カリキュラムへの満足感／大学生生活の充足感／学びの効率性の重視
大学の友人、先輩後輩、教員、職員など大学の人々との関係
中国人留学生間での知名度の高さ／教員を含めたゼミにおける良好な人間関係／SNSの活用による関係構築スキルの高さ／大学内での友人獲得／1年次からのゼミ履修による良好な人間関係／ゼミ以外の人との交流機会の少なさ／履修システムによる人間関係構築へのデメリット／ゼミ教員への親近感／「日本人学生との信頼関係構築の難しさ／中国人留学生への信頼感／相互依存的な関係
大学の居心地
大学キャンパスへの愛着未形成／オンライン空間の居心地への好意／有意義な時間活用／対面授業との比較によるオンライン授業のメリットの認識
所属大学の一員としての感覚（所属感）
所属大学のブランドへの無関心／留学生としての自覚／学問追求という留学目的
大学への自分の能力の提供
ボランティアでの能力提供の否定／自利他精神による留学生への情報提供／質の高い留学生獲得による大学環境の保全
自分の能力への周囲の評価
自己能力に対する教員からの直接的評価／情報収集能力への友人からの評価／自己有用感／自己肯定感
大学の人々との価値観の共有
日本人学生との価値観の相違／日中の社会構造の差異による学歴への価値観の差異
大学は自分に合っているか
カリキュラムによる適否の判断／大学ブランドの重視から教育内容重視へのシフトチェンジ／自由なカリキュラムへの肯定的評価／不満足な設置科目
所属大学の学生であることの重要性
大学の一員であることの軽視／中国の名門大学との比較／所属大学の研究環境への疑問／大学卒業のみの無意味さによる大学院への期待
大学への所属感や居心地、人間関係に関する新型コロナウイルスによる影響
コロナの影響による日本人学生との関係希薄化／留学生との関係維持／元々希薄な所属感／コロナの影響を受けない所属感
理論記述
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「学びの効率性の重視」をする留学生は、「カリキュラムへの満足感」があることで、「大学生生活の充足感」と「大学における被受容感」を覚える。 2. 「SNSの活用による関係構築スキル」の高さは、「留学生間での知名度の高さ」や「大学内での友人獲得」につながる。 3. 「ゼミ教員への親近感」など「1年次からのゼミ履修による良好な人間関係」構築が可能になる一方で、「ゼミ以外の人との交流機会の少なさ」という「履修システムによる人間関係構築へのデメリット」がある。 4. 留学生は「同国出身留学生への信頼感」があり「相互依存的な関係」を構築する一方で、「日本人学生との信頼関係構築の難しさ」を認識する。 5. 留学生は、コロナ禍において「大学キャンパスへの愛着未形成」の状態にある。 6. 「有意義な時間活用」など「対面授業との比較によるオンライン授業のメリット」の認識により、「オンライン空間の居心地への好意」を持つ。 7. 「留学生としての自覚」から「学問追求という留学目的」が明確な場合、「所属大学のブランドに対する無関心」な状態になる。 8. 「ボランティアでの能力提供の否定」をする留学生でも、「自利他精神による留学生への情報提供」をし「質の高い留学生獲得による大学環境の保全」を試みる。 9. 「自己能力に対する教員からの直接的評価」や「情報収集能力への友人からの評価」があることで「自己有用感」を覚え、「自己肯定感」も高い。 10. 留学生が感じる「日本人学生との価値観の相違」は、「日本と母国の社会構造の差異による学歴への価値観の差異」によるものである。 11. 「大学ブランドの重視」から「教育内容重視へのシフトチェンジ」をすると、「カリキュラムによる適否の判断」をする。 12. 大学について「自由なカリキュラムへの肯定的評価」をする一方で、「不満足な設置科目」の認識がある。 13. 「母国の名門大学との比較」による「所属大学の研究環境への疑問」がある。 14. 「大学卒業のみの無意味さによる大学院への期待」から現在の「大学の一員であることの軽視」をする。 15. 「コロナの影響による日本人学生との関係希薄化」がある一方でSNSの活用により「留学生との関係維持」をする。 16. 「元々希薄な所属感」は「コロナの影響を受けない所属感」である。

の活用による留学生との関係を維持したりしている。人間関係においては、日本人学生との関係が希薄になったというが、元々それほど強くなかった大学への所属感には大きな変化は見られなかった。

4.3 Cの所属大学に対するコミュニティ感覚

Cの所属大学に対するコミュニティ感覚については、43のテーマ・構成概念が得られ、17の理論記述が示された(表5)。まず、Cの「メンバーシップ」は、所属しているサークルへの感覚が中心になっている。サークルへの所属感の強さやサークルでの活躍が、大学への所属感や居場所を形成している(1, 2, 7, 9)。大学に対する自己能力の投資意識はないが(8)、サークルにおいては、自分の能力を発揮し、チームの強化に貢献している。「影響力」についてもサークルにおける活躍から、サークルメンバー間では存在感を放っている(9)。また、サークルメンバーとの協力関係やメンバーからの能力の承認がCの居場所を作るなど、互恵的な関係を築いている。

「統合とニーズの充足」については、Cは大学における専門的な学びの面白さへの気づき、満足感がある(12, 14)。学問においては個人的なニーズの充足はあり、大学の重要性も認識しているが(15)大学全体のメンバーとのニーズの共有には結びついていない。一方で、サークルのメンバーとの間には、大会で勝ち進んでいくなどのニーズを共有している感覚がある(7)。「情緒的つながりの共有」については、教職員やサークル以外の学生との関係は希薄であるが(4, 5)、サークルのメンバーとは深い絆があり、共に協力して大会や試合などの目標に向かっていく。

Cの所属大学へのコミュニティ感覚は、サークルコミュニティへの感覚が中心であり、その肯定的な感覚が所属大学へのコミュニティ感覚に影響している。コロナ禍においても問題なく活動できるesportsサークルへの強いコミュニティ感覚は、コロナ禍においても影響を受けることなく強化され続けている。

4.4 Dの所属大学に対するコミュニティ感覚

Dの所属大学に対するコミュニティ感覚については、50のテーマ・構成概念が得られ、20の理論記述がなされた。Dの「メンバーシップ」として、大学キャンパスで長時間過ごすことや学内のイベント参加による所属感の獲得があった(10)。大学キャンパスに愛着を持ち、居心地の良さを感じる(7, 8)など、情緒的安全感を覚えている。大学コミュニティのメンバーである、学生に対する自己能力の提供意識もある(14)。「影響力」については、教員からの肯定的な評価により、自己能力への自信と学部唯一のベトナム人留学生としての希少価値がある自分の存在感を認識している(3, 15)。また友人形成により自己存在感を得ることができる(11)など、大学コミュニティのメンバーからの承認によって、自己認識を強めている点で、互恵的な関係にあり、「影響力」の感覚はあるといえる。「統合とニーズの充足」の感覚については、所属大学がグローバルな大学ではな

表5 Cの分析結果（テーマ・構成概念と理論記述）

大学に受け入れられていると感じるか。
esports サークルへの所属感の強さ／サークルでの被受容感／所属大学への所属感／サークルでの活躍による所属大学での被受容感
大学の友人、先輩後輩、教員、職員など大学の人々との関係
サークルにおける「友達」／先輩との交流の少なさ／一般的なロールモデル獲得希求のなさ／サークル以外の友人との表面的な友人関係／サークル内での充実した人間関係の構築／教職員との希薄な関係／教員への相談希求のなさ
大学の居心地
キャンパスへの馴染み／キャンパス内でのオンライン授業受講希望／精神的な快適さ希求
大学の一員としての感覚（所属感）
所属大学の代表としての大会参加／所属大学へのメンバーシップ
大学への自分の能力の提供
自己能力の大学以外の場への還元意識／自分の能力を活かす場の探求
自分の能力への周囲の評価
サークルメンバーからの自己能力の高評価／存在感／周囲からの承認による居場所の獲得／教員からの能力承認のなさ／教員との交流機会や直接的な能力評価機会の欠如
大学の人々との価値観の共有
日本人とも中国人とも異なる独自の価値観／進路に関する意識の差異／一般的な進路への興味のなさ
大学は自分に合っているか
最上位大学再受験への希望／受験とは異なる大学での学修の醍醐味への気づき／再受験への気持ちの払拭／知識を得たことへの自信・満足感／将来研究職につくことへの意欲／より良い研究環境の模索／カリキュラムへの満足感／段階的な専門分野の決定への肯定的評価
所属大学の学生であることの重要性
所属大学の一員であることの重要性／学問・研究の追求／第一段階としての大学卒業／広い視野での進路決定
大学への所属感や居心地、人間関係に関する新型コロナウイルスによる影響
コロナによる同級生との交流のなさ／コロナの影響を受けないサークルの人間関係／コロナ禍での充実感／コロナの影響よりも大きい自身の心理的変容／コロナの影響を受けない大学への強い所属感
理論記述
<ol style="list-style-type: none"> 「サークルへの所属感の強さ」があると「サークルでの被受容感による所属大学への所属感」を認識する。 「サークルでの活躍による所属大学での被受容感」がある。 「サークル内での充実した人間関係の構築」により「サークルにおける『友人』」が中心となり、「サークル以外の友人との表面的な友人関係」がある。 「一般的なロールモデル獲得希求のなさ」から「先輩との交流の少なさ」がある。 「教職員との希薄な関係」の状態による「教員への相談希求のなさ」がある。 「キャンパスへの馴染み」のある留学生は「キャンパス内でのオンライン授業受講希望」などのコロナ禍での「精神的な快適さへの希求」がある。 サークルにおける「所属大学の代表としての大会参加」の機会から「所属大学へのメンバーシップ」を強く認識する。 「自己能力の大学以外の場への還元意識」から「自分の能力を活かす場の探求」をする。 「サークルメンバーからの自己能力の高評価」により「存在感」を放ち、「周囲からの承認による居場所の獲得」をする。 「教員との交流機会や直接的な能力評価機会の欠如」から「教員からの能力承認の欠如」を感じる。 「日本人とも同国出身の留学生とも異なる独自の価値観」がある留学生は、「一般的な進路への興味のなさ」から周囲との「進路に関する価値観の差異」を感じる。 入学当初「最上位大学再受験への希望」があっても「受験とは異なる大学での学修の醍醐味への気づき」から「再受験への気持ちの払拭」がされる。 大学で「知識を得たことへの自信・満足感」がある場合も「将来研究職につくことへの意欲」がある留学生は、修士課程進学における「より良い研究環境の模索」をする。 「段階的な専門分野の決定への肯定的評価」から「カリキュラムへの満足感」につながる。 「所属大学の一員であることの重要性」の認識は、今後「学問・研究の追求」をするために「広い視野での進路選択」をするうえで「第一段階としての大学卒業」の重要性の認識からくる。 「コロナの影響を受けないサークルの人間関係」が「コロナの影響を受けない大学への強い所属感」につながり、さらに「コロナ禍での大学生活の充実感」へとつながる。 大学生活のなかで「コロナの影響よりも大きい自身の心理的変容」がある。

表6 Dの分析結果(テーマ・構成概念と理論記述)

大学に受け入れられていると感じるか
コロナ以前の被受容感のなさ/大学生活の回顧による被受容感の認識/日本人と同等の教育の享受/奨学金制度/周囲からの支援への気づき
大学の友人、先輩後輩、教員、職員など大学の人々との関係
日本人学生との関係構築の困難さ/日本人学生の人見知りな性質/学部唯一のベトナム人であるという存在感/問題解決に至らない大学支援組織の対応への落胆/大学支援組織への不信心/留学生同士の困難点の共有/日本人学生からの支援、情報共有への期待/大学外での交友関係による悩みの解決/同国人コミュニティの不在/日本人学生、他の国の留学生との良好な友人関係構築
大学の居心地
大学キャンパスの居心地の良さ/設備や環境への好感/最適なキャンパスでの過ごし方の熟知/大学キャンパスへの愛着/人間関係構築が難しいオンライン授業の弊害/孤独感
所属大学の一員としての感覚(所属感)
物理的空間としての大学に居ることでの所属感/イベント参加・サークル参加による所属感の獲得/友人関係形成による自己存在感/就職活動による大学へのコミットメントの低下/コロナに因らない所属感の減退/就職活動における帰国の選択肢/母国における所属大学の認知度の低さ/大学の価値の再考
大学への自分の能力の提供
大学の広報の経験/社会や学生への自己能力提供意識
自分の能力への周囲の評価
教員からの日本人と同等の評価/教員の質問への丁寧な回答への感謝/教員からの間接的な能力承認/希少なベトナム人留学生としての自覚
大学の人々との価値観の共有
授業内での日本人学生の悩みの理解/日本人学生との類似した価値観/社会貢献意識/家族中心
所属大学は自分に合っているか
ドメスティックな大学への落胆/大学への違和感/日本人学生の異文化コミュニケーション能力の低さ
所属大学の学生であることの重要性
有名大学の一員であることのメリットの享受/所属大学の道具的価値の認識/大学卒業の重要性の認識
大学への所属感や居心地、人間関係に関する新型コロナウイルスによる影響
大学キャンパスへの郷愁/日本語でのコミュニケーション希求/コロナにおける留学意義/コロナ禍における支援制度の充実/大学への信頼感の回復
理論記述
<ol style="list-style-type: none"> 1. 留学生の「コロナ以前の被受容感のなさ」から「大学生活の回顧による被受容感の認識」へと被受容感が変化したのは、「日本人と同等の教育の享受」と「奨学金制度」の充実など「周囲からの支援への気づき」によるものである。 2. 「日本人学生との関係構築の困難さ」を「日本人学生の人見知りな性質」に原因帰属する。 3. 「学部唯一のベトナム人留学生であるという存在感」を認識する。 4. 「問題解決に至らない大学支援組織の対応への落胆」を感じ、「大学支援組織への不信心」が生じる。 5. 「留学生同士の困難点の共有」や「日本人学生からの支援、情報共有」があり、「同国人コミュニティの不在」の場合、「日本人学生、他の国の留学生との良好な友人関係構築」をする。 6. 「日本人学生の外国人の悩みの理解の不可能さ」の認識から「大学外での交友関係による悩みの解決」を試みる。 7. 「設備や環境への好感」から「大学キャンパスの居心地の良さ」を感じる。 8. 「最適なキャンパスでの過ごし方の熟知」をし、「大学キャンパスへの愛着」がある。 9. コロナ禍の大学の授業について「人間関係構築が難しいオンライン授業の弊害」を実感し、「孤独感」を感じる。 10. 「物理的空間としての大学に居ることでの所属感」や「イベント参加・サークル参加による所属感の獲得」がある。 11. 「友人関係形成による自己存在感」を認識する。 12. 「就職活動による大学へのコミットメントの低下」から「コロナに因らない所属感の減退」がある。 13. 「就職活動における帰国の選択肢」から「母国における所属大学の認知度の低さ」を意識し「所属大学の価値の再考」につながる。 14. 留学生としての「大学の広報の経験」から大学に対してよりも「社会や学生への自己能力提供意識」がある。 15. 「教員からの日本人と同等の評価」と「教員の質問への丁寧な回答への感謝」、「教員からの間接的な能力承認」は、「希少な留学生としての自覚」を芽生えさせる。 16. 「授業内での日本人学生の悩みの理解」をきっかけに「社会貢献意識」や「家族中心」の意識において「日本人学生との類似した価値観」があると認識する。 17. 「日本人学生の異文化コミュニケーション能力の低さ」から「ドメスティックな大学への落胆」を経験し、「大学への違和感」がある。 18. ささまざまな場面で「有名大学の一員であることのメリットの享受」をし、日本国内における「所属大学の道具的価値の認識」をすることで、「大学卒業の重要性の認識」をする。 19. コロナ禍において「大学キャンパスへの郷愁」や「日本語でのコミュニケーション希求」があり「コロナ禍における留学意義の減退」が生じる。 20. 「コロナ禍における支援制度の充実」を感じ、「大学への信頼感の回復」がおきる。

いという認識からDのニーズを満たすことはなく(17)、所属大学の日本国内における価値と海外での価値の違いがあることから、就職活動を通して大学のメンバーとの認識のずれを感じている(13)。一方で、授業における日本人学生との悩みの共有により、日本人学生と自分との間に類似した価値観がある(16)という認識もある。「情緒的つながりの共有」については、日本人学生からの日本語サポートを受けたりするなどのポジティブな交流がある(5)一方で、外国人留学生特有の悩みは、日本人学生には理解できないという思い(6)や、日本人学生の人見知りな性格や異文化コンピテンスの低さから、関係構築が難しい(2,17)という感覚を抱いている。また、日本国内における所属大学の価値を認識していることから、大学の一員であることが自分にとって大切なことであるとも感じている(18)。Dのコミュニティ感覚は、メンバーシップの感覚は比較的高く、D自身が大学にコミットメントしようとしている努力も窺える。しかしながら所属大学が「グローバルではない」という認識がDのコミュニティ感覚の減退に影響している。コロナ禍においては、大学コミュニティにおける物理的な居場所を失ったことやオンライン授業での孤独感などから留学意義への疑問も生じた。しかし、コロナ禍において所属大学からのさまざまな支援があったことで、1年次のサポート希求への対応の悪さにより失っていた大学への信頼感が回復するなど、一部コミュニティ感覚の高まりも見られる。

4.5 Eの所属大学に対するコミュニティ感覚

Eの所属大学に対するコミュニティ感覚については、46のテーマ・構成概念が得られ、15の理論記述がなされた。

Eの「メンバーシップ」は、教職員との良好な関係が中心にある。被援助志向性やサポート希求スキルが高く、教職員からの支援をうまく引き出すことで、被受容感や所属感を強く認識している(1,3)。自分の能力を大学の後輩のために提供したいという意欲も高い(8)。「影響力」の感覚については、英語力への自信から英語などの授業において教員との対等な意見交換や提案ができることによる自己効力感が得られている(9)。また、このような自身の能力を活かした授業での提案とこれまでの教職員からの被援助経験から、教員と互恵的な関係にあるとの認識が見られる。「統合とニーズの充足」は、大学における学びの充実感や理想通りの大学生活であると認識する(11,12)などEのニーズの充足は日本での就職意識につながっている。Eは大学の教職員と「日本就職」という共通の目標を有し、支援-被支援という関係だけではない共同意識を感じている。「情緒的つながりの共有」については、Eは大学の教職員に信頼感や感謝の念を抱いている(7)。それは、これまでの熱心な指導や支援などのポジティブな交流によるものである。Eのネットワーキングスキルの高さは、教職員だけでなく、留学生との関係構築にもつながっており(2)、一人ひとりが持つ異なる価値観を尊重する意識もある(10)。また、Eは大学において自己成長を感じており、その機会、環境を提供してくれた大学の重要性を感じている(13)。

表7 Eの分析結果(テーマ・構成概念と理論記述)

大学に受け入れられていると感じるか
所属大学における被受容感/大学におけるネットワーキング/大学教員の丁寧な支援/大学における留学生の割合の高さ/留学生ネットワークの充実/大学におけるサポート源の活用/被援助志向性/サポート源としての大学教員への信頼感
大学の友人, 先輩後輩, 教員, 職員など大学の人々との関係
親密な人間関係/就職活動時の道具的サポート/サポート希求/被援助経験/安心感
大学の居心地
コロナ禍でも変わらない在留・就職に関する支援/コロナ禍での授業形態の変化/コロナ混乱期における不十分な授業サポートへの理解/オンライン授業での教員からのサポート減少による辛さ/コロナ禍における対面イベントの中止への落胆
所属大学の一人としての感覚(所属感)
大学への所属感/教員のさまざまな支援に対する感謝/イベントにおける存在感/教員の支援
大学への自分の能力の提供
所属大学への貢献意欲/自己能力を活かした後輩への支援意欲
自分の能力への周囲の評価
自己能力に対する教員や友人からの高い評価/得意な英語における教員との対等なやりとり/自己効力感
大学の人々との価値観の共有
一人一人の価値観の相違/大学における多様な価値観の内包/他者の価値観の尊重
所属大学は自分に合っているか
高校生の時からの興味のある分野/学びにおける欲求充足/自分に最適な大学/理想通りの大学生活/現状への満足感/就職希望/日本での将来展望
所属大学の学生であることの重要性
大学の一人であることの重要性/自己成長/大学の内在的価値/大学で得た能力/社会貢献/日本での就職を叶えるための道具的価値/日本の大学卒業の海外・母国における道具的価値のなさ/日本国内での重要性
大学への所属感や居心地, 人間関係に関する新型コロナウイルスによる影響
コロナの影響を受けないほど強い所属感
理論記述
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「被援助志向性」が高い留学生は「大学におけるサポート源の活用」を十分にし「大学教員の丁寧な支援」を引き出すことで「サポート源としての大学教員への信頼感」を感じ「所属大学における被受容感」を感じる。 2. 留学生に「大学におけるネットワーキングスキル」の高さがあり、「大学における留学生の割合の高さ」がある場合、「留学生ネットワークの充実」を認識する。 3. 「就職活動時の道具的サポート」などの「サポート希求」時の「被援助経験」が、所属大学の人々に対する「安心感」と「親密な人間関係」の構築につながる。 4. 「コロナ禍でも変わらない在留・就職に関する支援」から居心地の良さを感じる。 5. 「コロナ禍での授業形態の変化」での「オンライン授業での教員からのサポート減少による辛さ」を経験しても「コロナ混乱期における不十分な授業サポートへの理解」を示す。 6. 「対面交流の重要性」を実感する留学生は、「コロナ禍における対面イベントの中止への落胆」がある。 7. 「イベントにおける存在感」の提示が「教員の支援」によると認識すると、「教員のさまざまな支援に対する感謝」から「大学への所属感」を強く感じる。 8. 「自己能力を活かした後輩への支援意欲」などの「所属大学への貢献意欲」が高い。 9. 「得意な英語における教員との対等なやりとり」から「自己能力に対する教員や友人からの高い評価」を認識し、「自己効力感」を感じる。 10. 「一人一人の価値観の相違」を認識し「大学における多様な価値観の内包」を当然視する留学生は、「他者の価値観の尊重」意識がある。 11. 大学の専攻が「高校生の時からの興味のある分野」である留学生は、「学びにおける欲求充足」がされ、所属大学を「自分に最適な大学」とであると認識する。 12. 「理想通りの大学生活」で「現状への満足感」があると、日本での「就職希望」をするなど「日本での将来展望」をもつ。 13. 「自己成長」の実感による「大学の内在的価値」の認識から、「大学の一人であることの重要性」を感じ、「大学で得た能力」を生かし「社会貢献」したいと思う。 14. 所属大学への「日本での就職を叶えるための道具的価値」の認識は、同時に「日本の大学卒業の海外・母国における道具的価値のなさ」の認識も生じさせ、「日本国内での重要性」に限定した価値を認識する。 15. 「コロナの影響を受けないほど強い所属感」を有している。

Eの所属大学に対するコミュニティ感覚は総じて高いといえる。コロナ禍において、イベントが行われないことへの落胆などはあるものの、教職員からのコロナ以前と変わらない支援を得られることで、コミュニティ感覚が減退することはなく、高いコミュニティ感覚を有した状態が続いている。

5 総合的考察

5.1 留学生のコミュニティ感覚へのコロナ禍の影響

5名の留学生のコロナ禍におけるコミュニティ感覚の変化に着目すると、コロナによる影響は限定的であるといえる。Aのように当初からコミュニティ感覚が希薄であったものは、コロナ禍においてもコミュニティ感覚が高まることはなく、BやEのようにコミュニティ感覚が比較的高い状態にあったものは、コロナ禍においてもそのコミュニティ感覚の高さを維持している。Cの事例からは、コミュニティ感覚の変化は、コロナそのものの直接的な影響というよりは、コロナ禍において自分自身と向き合った結果であるといえる。Cは、入学後しばらくは他大学の再受験を考えていたが、esportsサークルの仲間との出会いと密な交流、大学の学びの奥深さを知ったことがきっかけとなり、所属大学に留まることを決めた。そのような自身の意識の変化により、コロナ禍においても所属大学へのコミュニティ感覚の高まりがおきていたと考えられる。Dの事例からは、コロナ禍におけるコミュニティ感覚の揺らぎが見られた。コロナ禍において所属大学からのさまざまな支援があったことで、コミュニティ感覚が一部高まった一方で、コロナ禍において物理的居場所を失った孤独感などにより所属大学へのコミュニティ感覚の減退も見られる。また、コロナのみにかかわらず、就職活動など大学生活におけるさまざまな場面において、自分を取り巻く環境である大学と向き合う機会から、コミュニティ感覚も変化しているようである。

常日頃から留学生のコミュニティ感覚を高めるような取り組みが重要であるが、C、Dの事例からは、対面の交流が制限されるなかでも、オンライン上での密なやりとりや、丁寧な支援があることでコミュニティ感覚が高まる可能性が示唆された。

5.2 留学生の所属大学へのコミュニティ感覚を高める

5名のコミュニティ感覚の分析結果から、留学生のコミュニティ感覚を高める可能性のある要素として、所属大学において被受容感を得られているか、自己有用感が得られるか、ということがあげられる。B、C、D、Eは、いずれも大学からの被受容感があると感じている。また、Bは教員や留学生、Cはサークルメンバー、D、Eは教員との関係において、自己能力への肯定的な評価があると感じられることで自己有用感を覚え、コミュニティ感覚につながっていることが窺える。一方、Aは、周囲からの自己能力への評価が感じられないことから、所属大学における自己有用感を

ることができずにいた。つまり、留学生の自己有用感を何らかの形で高めることができれば、所属大学へのコミュニティ感覚を高められる可能性がある。留学生の自己有用感を高めるためには、先に述べた通り、周囲からの肯定的な評価が重要であり、特に、課外活動（サークルやイベント）や、授業における教員や学生同士の双方向的なやりとりのなかでの肯定的な評価が重要であるといえる。井上・久田（2015）においても、コミュニティ感覚の高低に、教員からのサポートや授業に対する満足度、課外活動へのコミットメントの度合いが影響していることが示されているが、本研究においては、それらが留学生の自己有用感を満たすことに影響し、コミュニティ感覚が高まることにつながる可能性が示された。

留学生は、日本人学生と同様の青年期の課題や勉学の成就といった課題を持つことに加え、異文化である日本への移動に伴い、日本文化・社会への適応、日本語の習得などの課題も加わる（横田・白土、2007）。多くの課題を抱えるうえに、日本文化・社会への適応においては、新しい文化から拒絶される感覚を味わったり、自分が果たすべき役割、意味、アイデンティティが混乱したりするカルチャーショックの状態を経験した留学生も多いだろう。そのため、日本社会においてありのままの自分が受け入れられていると感じられ、自己有用感を得られる場が、留学生にとって貴重なコミュニティになり得ることは、想像に難くない。

さらに、留学生のコミュニティ感覚を高めるうえでは、日本人学生との関係も重要である。A、B、Dは日本人学生との関係構築の難しさや関係の希薄さ、学生の異文化コンピテンスの低さなどを感じており、それがコミュニティ感覚の一要素である「情緒的つながりの共有」に負の影響を及ぼしている可能性が示されている。大学環境の整備として、カリキュラムや授業の充実、教職員による支援、サークルやイベントなどの課外活動の充実に加え、学生の異文化コンピテンスを高めるような取り組みが重要であろう。日本人学生、留学生双方の異文化コンピテンスの育成により、両者のより良い関係を構築することで、留学生のコミュニティ感覚を高める可能性が示唆された。

6 まとめと今後の課題

以上の通り、5名の留学生のコミュニティ感覚が示され、留学生が被受容感、自己有用感を得られることや、日本人学生、留学生の異文化間コンピテンスを高めることが、留学生のコミュニティ感覚を高める可能性を示した。しかしながら、本研究は5名の留学生を対象とした研究であることから、過度な一般化はできない。今後は、日本の大学に所属する留学生を対象とした質問紙調査を実施することで、留学生のコミュニティ感覚の全体的な傾向を示したい。また、コミュニティ感覚を高める要因を示すことで、より良い大学環境を作り上げることに寄与したい。

引用文献

- Dalton, J. H., Elias, M. J. & Wandersman, A., *Community Psychology: Linking Individuals and Communities*. Thomson Learning, 2001.
- (J. ダルトン・M. イライアス・A. ウォンダースマン著 笹尾敏明訳『コミュニティ心理学—個人とコミュニティを結ぶ実践人間科学—』トムソンラーニング 金子書房.)
- 池田満「大学生の心理的コミュニティ感覚：日本と韓国の異文化間比較」『国際基督教大学学報。I-A, 教育研究』vol.48 2006 pp.151-160.
- 井上麻衣・久田満「大学生における所属大学へのコミュニティ感覚—測定尺度の開発と関連要因の検討—」『上智大学心理学年報』39巻 2015 pp.53-60.
- 近藤佐知彦・倉佑季子・中野遼子「学校および留学生・日本人学生が直面した留学交流に関する令和2年の課題（4月末から5月にかけてのアンケート調査報告）」『グローバル人材育成教育研究』8巻1号 2020 pp.70-76.
- Lounsbury, J. W., Loveland, J. M., & Gibson, L. W., “An investigation of psychological sense of community in relation to big five personality traits” *Journal of Community Psychology*, 31, 2003, pp.531-541.
- McMillan, D.W. & Chavis, D. M., “Sense of community: A definition and theory” *Journal of Community Psychology*, 14, 1986, pp.6-23.
- 村田晶子「コロナ禍の『日本留学—外国人留学生の孤独とレジリエンス—』『多文化社会と言語教育』2巻 2022 pp.1-15.
- 新見有紀子「第2章 留学のインパクトに関する国内外の研究概要」横田雅弘・太田浩・新見有紀子（編）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』学文社 2018 pp. 29-47.
- 日本学生支援機構（2021.3）「2021（令和3）年度外国人留学生在籍状況調査結果」（<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html>）〈2022.11.10 確認〉
- 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第54巻第2号 2007 pp. 27-44.
- 大谷尚「SCAT：Step for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』Vol.10 No.3 2011 pp.155-160.
- 大谷尚『質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会 2021
- Sarason, S. B., *The Psychological sense of community: Prospects for a community psychology*. San Francisco: jossey-Boss, 1974.
- 笹尾敏明「II-15 コミュニティ感覚」植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満（編）『よくわかるコミュニティ心理学』ミネルヴァ書房 2010 pp.58-61.
- 出入国管理庁（2022.1.28）「令和3年における外国人入国者数及び日本人出国者数等について」（<https://www.moj.go.jp/isa/content/001364211.pdf>）〈2022.11.10 確認〉
- 藤媛媛・林萍萍「新型コロナウイルス感染拡大が中国人留学生に与える影響—その生活・心理・行動に着目して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第7号 2021 pp.47-56.
- 高橋朋子「『“オール近大” 新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト』におけるアンケートならびにインタビュー調査の結果から—留学生が抱えた困難と課題—」『近畿大学教育論叢』第33巻1号 2021 pp.173-195.
- 植村勝彦・笹尾敏明「第8章 コミュニティ感覚と市民参加」植村勝彦（編）『コミュニティ心理学入門』ナカニシヤ出版 2010 pp.161-182.
- 横田雅弘・白土悟『留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか—』ナカニシヤ出版 2006

Psychological Sense of Community among International Students who Studied in Japan during COVID-19

Kayo OKAMURA

Abstract

This study examines international students' psychological sense of community. The educational environment and the university community environment surrounding international students changed significantly due to the COVID-19 pandemic. In this context, it is important to understand the students' experiences while studying abroad. Data were collected, using questionnaires and interviews, from five international students at a private university in Tokyo, and the results were analyzed using SCAT. The results showed generally limited impacts on, or changes to, the students' sense of community as a consequence of the COVID-19 pandemic. In addition, it is suggested that international students' sense of community could be enhanced by encouraging them to experience a sense of self-efficacy and acceptance, and by increasing the cross-cultural competence of both Japanese and international students.

Key words: International students, Psychological sense of community, COVID-19, University, community, SCAT